

國學院大學學術情報リポジトリ

義孝集論：その成立と表現

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-05-22 キーワード (Ja): 『義孝集』, 私家集, 往生歌, 成立, 表現 キーワード (En): 作成者: 野澤, 早希 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001654

論 文 要 旨

学籍番号	233203	氏 名	野澤 早希
論文題目： 義孝集論-その成立と表現-			
(内容の要旨) 本論文では、藤原義孝の私家集である『義孝集』を取り上げる。『義孝集』は全八〇首入集され、父の死などによる厭世的な詠みぶりのある歌や女性たちとの贈答歌などが七六首ある。その巻末に義孝の死後、人の夢に現れて詠まれたとされる往生歌が和歌三首漢詩一編と見られることは大きな特徴である。これまで『義孝集』の伝本に関する研究をはじめ、編纂に関する研究や往生歌の内容の意義を扱う研究はなされてきたが、『義孝集』の成立や往生歌の表現については十分言及されていない。これをふまえ、『義孝集』の概観や往生歌を中心とした表現を捉えることで、今日までどのように形成されてきたのかを明らかにすることを目的とする。 第一章では、『義孝集』の概観を捉えるために巻末に入集される往生歌に着目し、往生歌が詠まれることの意義や家集に入集される理由を取り上げる。死者が夢で詠む歌を分析し、歌を通じて死者の願いに寄り添おうとする生者の姿から、往生歌を詠む背景を確認した。これをふまえ、死者追悼による私家集の編纂動機を確認し、『義孝集』も同様の意識や義孝の意思を反映して成立したと考えた。また、往生歌は義孝が説話的に語られる人物像と連動し、家の意識を背景に語り継がれることを論じた。 第二章では、往生歌のうち義孝が極楽浄土で楽しむ姿が見られる七七番歌を取り上げた。当該歌の「しくれとはちくさのはなそちりまかふ」に着目すると、「しくれ」(時雨)と「ちくさのはな」を重ねて詠む唯一の例である。このことから、なぜ義孝が過ごす様子を「しくれ」が「ちくさのはな」のように降ると詠むのかを検討した。「しくれ」と「ちくさのはな」それぞれの詠まれ方を確認し、七七番歌において「しくれ」が生者の亡くなった悲しみが詠まれ、「ちくさのはな」に義孝の往生できた喜びが詠まれる双方の思いを明らかにした。 『義孝集』の成立と往生歌は、家や義孝の意思の反映や残された人々の思いが見られる。これまで『義孝集』は、伝本を中心とした視点からの享受の背景や義孝の半生が感動を与えるものとして往生歌が捉えられてきた。しかしながら、往生歌が詠まれる背景となる死者が詠む歌や私家集の編纂意識、一部ではあるが往生歌の表現から、成立や往生歌の本質の一端を明らかにした。往生歌をはじめとした「義孝集論」は、これまでの『義孝集』の認識とは異なり、義孝や周囲の意思の反映が強く見出されると考えられる。(999字)			
キーワード (5 語) 『義孝集』 私家集 往生歌 成立 表現			